

それぞれのウィーン

そのとき私は三十六歳で、人生において、諦め、手放していることがあった。映画を観ても小説を読んでも絵画を見ても音楽を聴いても、心をつかまれて揺さぶられる、というようなことが、久しくなくなっていた。二十代のころにそうだったような、ああした生々しい感動は、この先もう得られないだろうなと思っていた。新しいものではなく、若いときに衝撃を受けたいいくつかの小説を読み返し音楽を聴き続け、そうして老いていくのだろうなと、諦めていた。この先も続く、感動のない人生には失望したけれど、しかたのないことだった。

旅も然り。夏も終わったころによくとれた夏休みのいき先に、ウィーンを選んだのは、とてもいいところだとだれかから聞いたからだった。たしかにとってもいいところなのだろうと、出発前に思っていた。でもきっと、「とてもいい」以上のことはないだろうな、とも。そのへんてこりんな建物を見つけるまで。

ウィーンに着いた翌日である。地理を覚えるため、町をぐるりと一周する路面電車に乗った。興味をひかれた場所で降りて散策し、また、乗りこむ。そしてふたたび、窓の外に見入る。ある駅で降りて歩いていたら、その奇妙な建物は忽然とあらわれた。たくさんの窓は空を映し、外壁は子どもの落書きのように自在に塗られ、タイルが貼られ、おもちゃみたいな色とかたちの柱が、エントランスに建っている。窓を見上げると、内部に飾られた観葉植物が見え、まるで、空に映えた植物みたいに見えた。私は不審に思いながら建物内に入った。美術館だった。私が今まで名を聞いたこともない芸術家の、絵画やオブジェや写真が、数多の観葉植物とともに飾られている。美術館の床はたいらではなく、ときどきくね曲がっていた。絵画を眺めながら歩くうち、私は、叫びだしそうになっていることに気づいた。自分のなかに子どもがいて、その子どもが、興奮きったときにそうするように、両手で髪をかきむしりながら、大声で笑ってぐるぐるまわっているように感じていた。

きれいで、うつくしい、かわいい、エキセントリック、自由——どんな言葉も浮かばなかった。ただ私は、いや、私のなかの子どもは、興奮ききって、歓喜に我を忘れて、叫び続けていた。この先きっと味わうことなどあきらめていた、それこそまさに感動だった。

美術館というよりも、不可思議な館を出た私は、熱に浮かされるようにふらふらと町を歩いた。ああ、そうだ、この町にきたらあれを食べようと思っていったんだ、ザッハートルテ。いちばん有名なお店で。そうだ、お茶を飲んで少し落ち着こう。ここからどうやっていけばいいのだけ。

その有名店の場所はあらかじめ調べてあったのだけれど、美術館の興奮で判断力を失った私は、向かいから歩いてくる、日本人とおぼしき老夫婦に、吸いこまれるように近づいていった。

「あの、ザッハーってお店にいきたいのですが、どうやっていけばいいんでしょう」

子どものように私は訊いた。訊きながら、旅行者に訊いたってわかるはずはないよな、と思っていたのだが、「ああ、あの有名なところね」老婦人が笑顔でうなずく。「歩くには少し遠いわ。電車に乗りましょう」老夫婦は私を導くように町を歩き、路面電車に乗った。

その老夫婦がウィーンで出会ったことを、夕食の席で知った。私たちはいちばん有名なカフェでザッハートルテを食べながら、夕食をいっしょにする約束もしたのだった。シュテファン寺院の裏手、ちいさな路地にあるごはんまりとしたレストランに、老夫婦は連れていってくれた。昨日もここで食事をしたのだという。ワインで乾杯をしたあとに、ウィーンでの出会いを老婦人が話しはじめた。

四十数年前に、きみ子さん(というのが老婦人の名だった)は留学していた恋人を訪ねてドイツにやってきたが、彼にはほかの恋人ができていて、逃げるようにウィーンにきた。海外旅行なんて今ほど手軽ではなかった時代に、貯金のすべてをつぎこみ、親にも借金をして、一世一代の覚悟でやって

きたのに、そんなありさまだったから、もう死んでもいいと思っていた。そんな気持ちがそう見せたのか、あるいは四十数年前のウィーンは実際にそうだったのか、どこもかしこも陰影のある、暗い町だった。死ぬにはちょうどいいようにも思えた。

「でもね私、強烈な光を見てしまったの」ときみ子さんは、たった今それを見たかのように大きく目を見開いていった。夫の繁治さんは、妻の恋人だの失恋だのといった話をおだやかな笑みで聞いているから、幾度も聞いているのだらうと思いつつながら、光ってなんですかと私は訊いた。

「絵なの。はだかんぼうの家族がしゃがみこんでいる絵なの。そこからばあっと光が放たれて、わけがわからないまま、私泣いてしまってね。それで気づいたの、絵を見ようと美術館に入ったってことは、本当には死にたくなんかないんだわ。こうして泣いているってことは、まだまだ生きていきたいんだわ、って。だって、生きる意志のある人にしか、感動は訪れないはずなもの」

私はきみ子さんの話を聞きながら、さっきの感覚を思い出していた。自分のなかの子どもが叫びやめないような高揚。まだまだこの先、きっと何度でもそんな瞬間はあると思ったときの、震えるほどの安堵。きみ子さんの言っている絵は、おそらくエゴン・シーレだ。学生のころ教科書で見たことがある。そんなに明るい絵ではなかったはずだ。でも、光は射したのだ。きみ子さんだけに。

レストランを営んでいるのは、きみ子さんたちと同世代とおぼしき老夫婦だった。奥さんがスープ皿を下げると、夫がシュニツェルの皿を厨房からカウンター越しに渡している。薄いシュニツェルはさくさくしててじつにおいしかった。にんにくのおいにするポテトサラダがすばらしくおいしい。私たちはおいしい、おいしいとひとつおりの言い合ったあと、それぞれにワインをつぎあう。

「その絵を見た美術館で繁治さんに会ったんですか」私は食事をしながら訊いた。

「私はウィーンを舞台にした小説を読んでね」今度は繁治さんが話し出す。

「私が学生のころに出版されたんだ。そこにはね、ウィーンは死の町だって描写がある。それでどうしても見たくなかった、その、死の町というところを。それで卒業旅行にと、思い切ってウィーンにきたんだ。ずいぶん無理をして」

「死の町なんて形容にふさわしい町だったんですか」今日の、陽にさらされて、観光客がそぞろ歩いていた明るい市街地を思い描いて私は訊いた。

「思ったほどではなかったよ。いや、ちっとも暗くなんかなくて、陽気な明るい町だったよ」と言ってから、繁治さんはワインをじっと見つめ、一口飲んで、笑う。「しかしそれもぼくの印象かもしれない。ある食堂に入って、スープを頼んだら、飲んだことがないくらいおいしかった。ちょうどこの、ポテトサラダみたいに、知ってる味なのに、もっとずっとおいしいんだ。それでお店のおかみさんに、これはどうやって作るのかと身振り手振りで訊いたんだ。だけどそのおかみさんは、英語を一言もしゃべることができない。でも、ぼくの訊いていることはわかる。一生懸命答えようとして、ぱっとお店を出ていって」繁治さんが笑うと、きみ子さんも笑った。この話も二人のあいだで幾度も交わされているのだろう。「十分ほどたって英語を話せる人とともにあらわれた。近所の知り合いなんかじゃない、シュテファン寺院までいって観光客を連れてきてくれたんだ、わざわざ、スープの作り方を説明するためだけに」

その気持ちか本当にありがたかったから、町が、ぱっと明るく見えたのかもしれないと繁治さんは言った。地下鉄に乗っても、夜の暗い道を歩いても、おかみさんの太陽みたいな明るさが、若い旅行者の歩く先を照らし続けていたのかもしれない、と。

二人はそれぞれの思い出話をしただけで、出会いの部分は話さなかった。繁治さんの話が終わるころには料理も食べ終えていて、デザートに何を食べるかという話に終始した。

そのときから気がつけば十年もたっている。有名なザッハトルテのカフェは未だ健在だが、あのとき老夫婦といったレストランをさがしてみたが見あ

たらない。このあたりなんだけれど、と私は夫とともに路地をうろつく。結局見つけることができず、私たちはべつのレストランに入って、赤ワインと、夫はグーラシュを、私はシュニツェルを注文する。五年前に結婚した夫とは、年に一度、夏休みを合わせて旅をしている。今年はどこにこうと話していて、私はふと思い出した、フンヴェルトヴァッサーの美術館と、その旅行で会った老夫婦の話をついに夫にした。夫も学生時代にウィーンに立ち寄ったことがあると言った。ヨーロッパを一周旅行している際に立ち寄ったのだという。何か印象に残ったものはある？ と私は訊いた。私にとっての美術館みたいな、老婦人にとってのシーシミアみたいな、老紳士にとってのおかみさんみたいな。

「ザッハートルテ」しばらく考えて夫は言った。「甘いもの、好きじゃないんだけど、ドイツで財布をすられたあとだったから、あの甘さに救われた」と真顔で言う。私は笑い、そうして今年はウィーンにこうと話がまとまったのだった。

十年前の店とは異なるのに、やっぱり老齢の男性が調理したものを、妻らしき白髪の女性が持ってきてくれた。食事をはじめて私は首をかしげる。ポテトサラダが、あのとき食べて感激したものとそっくりに見えるのだ。私は彼女がワインをつぎ足しにきたときに、得意ではない英語を駆使して訊いてみる。十年前もこのお店はここにありましたか？ 言いながら、でもそうしたら、この夫妻はもっと老けているはずだと気づく。夫が、私よりはましな英語で訊きなおしてくれるが、どうやら彼女は英語を解さないようである。私はそっと店内を見まわすが、さっきまでいた客はもういない。待っていて、と老婦人はジェスチャーで示す。だれか連れてくるから、と言っているようである。「ノー！」私はあわてて言った。「いいの、いいんです。OKです」なんだか彼女が、シュテファン寺院まで行って英語を話せる観光客をさがしてくるような気がしたのである。

いいの、本当に？ という顔つきの彼女に数度うなずくと、彼女もうなずき厨房に戻る。つがれたワインを口に含み、このポテトサラダおいしいよと

夫に言おうとしたとき、ある光景があまりにも鮮やかに思い出される。

老夫婦と、カフェでザッハトルテを食べたとき、窓際の席に若い日本人が座っていなかったか。一目でバックパッカーとわかる、みすぼらしい格好と大きな荷物。とくに気に留めていなかったのだが、運ばれてきたザッハートルテを一口食べた彼が、テーブルに突っ伏すのが視界の隅に映り、ぎよっとして注視した。彼は顔を上げると、シャツの袖で顔をこすり、猛然とザッハートルテを食べはじめた。おいしすぎて泣いている人がいますよと、私は老夫婦に言えなかった。そんなふうにな化すことができなかった。

いやいや、そんなはずはない。私よりひとつ年上の夫は、十年前はすでに大学生ではない。私の旅した時期と、彼の旅した時期はまったく違う。会っているはずがない。彼の話聞いたから、そんな錯覚が見えてしまっただけだ。

食事を終えて、私たちはまだ明るい夜の町を歩く。町をまるくつなぐ路面電車に乗り、窓の外の景色に見入る。もしかしてあの夫婦も、実際にはウイーンで会ったのではないかもしれない、と思う。日本で出会い、互いの過去を話すうち、ウイーンが偶然にも一致した。そうして、その場で会ったような気持ちになった。私も実際、失恋した女の子がエゴン・シーレに陶然と見入るのや、日本の青年がお店のおかみさんと笑い合うのを、あの旅で見かけたように記憶している。

もしかしたら、この町はそんなふうな不思議なところなのかもしれない。時間も空間も、その境をすべて消して、いっぺんに存在させる。円を描くように町を走るこの電車が、年齢も出身地も言葉も飛びこえて、だれかのとくべつな記憶を縫いつなぐ。今食べたポテトサラダは十年前に食べたサラダで、お店の老夫婦はいっさい年をとらずにあのままあそこに居続ける。私は何度でも、シーレと対面する女の子と卒業旅行の男の子と、ザッハートルテに泣く若者と、そして老夫婦に会い続ける。一年後も、十年後も、幾つもの人生がこの町で交差し続ける。